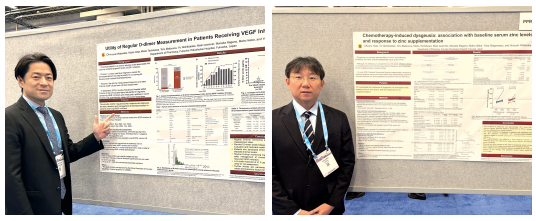
福岡徳洲会病院薬剤部

演題発表など学術活動に意欲

渡邊部長と秦副部長が「FIP2026」へ参加

福岡徳洲会病院薬剤部の渡邊裕之部長と秦晃二郎・副部長は、カナダ・モントリオールで開かれた第84回国際薬剤師・薬学連合国際会議（FIP2026、8月30日～9月2日）でポスター発表を行った。同部署は近年、渡邊部長の方針の下、部署全体で学術活動に励み、学会発表や論文執筆など精力的に取り組んでいる。



FIP2026で研究成果を発表する渡邊部長（左の写真）と秦副部長

渡邊部長の発表は「Utility of Regular D-dimer Measurement in Patients Receiving VEGF Inhibitors」（VEGF阻害薬投与患者におけるDダイマー定期測定の有用性）がテーマ。VEGF阻害薬は、血管内皮増殖因子（VEGF）という物質を不活発化することで腫瘍組織の血管新生を抑制する薬。がん細胞の増殖を阻害する効果が期待できる一方、血栓塞栓症をはじめ重篤な有害事象と関連することが知られている。

渡邊部長は、血栓塞栓イベントの診断に広く用いられているバイオマーカーにDダイマーを挙げながらも、その有用性がVEGF阻害薬で十分に報告されているのはベバシズマブを投与した患者さんのみで、「ラムシルマブなど、その他のVEGF阻害薬に関するエビデンスは限定的で、最適なモニタリング頻度に関する合意形成もなされていない」と指摘。自院で2023年12月にVEGF阻害薬投与後のDダイマー定期測定を運用方針として導入したことを紹介し、同方針が血栓塞栓イベントの早期発見・管理に及ぼす影響について検討結果を発表した。

診療記録から、定期測定の導入前群と導入後群に分けて評価した結果、Dダイマー測定率は5.5%から74.0%に大幅に上昇。VEGF阻害薬投与患者さんに対する血栓塞栓症の早期発見・早期対応につながる可能性を示した。また、Dダイマー値が1.0 μg/mLを超えるケースでは、追加の診断的評価や治療変更の契機となっていたことから、同値がリスク評価で臨床的有用性を有する可能性を示唆し、より安全かつ効率的な治療プロトコル（実施計画書）を確立するため、さらなる検討に意欲を見せた。

秦副部長は「Chemotherapyinduced dysgeusia: association with baseline serum zinc levels and response to zinc supplementation」（化学療法に起因する味覚障害：治療前血清亜鉛値との関連および亜鉛補充療法への反応性）がテーマ。まず、がん化学療法に起因する味覚障害について「頻度の高い有害事象」とし、患者さんの生活の質（QOL）や治療への参画意識を低下させる点を説明した。リスク因子には亜鉛欠乏が認識されているものの、化学療法との具体的な関連や、亜鉛補充療法のメリットに関する臨床的エビデンスが不十分な現状も指摘した。

そのうえで、自院では23年6月以降、新規のがん化学療法患者さんに対し、レジメン（治療計画）開始時に血清亜鉛値を測定し、亜鉛欠乏患者さんが味覚障害を生じた場合には、経口亜鉛製剤を投与するプロトコルを運用している取り組みを紹介。

同年12月まで新規がん化学療法レジメンを開始した165例を対象に、効果を検証したところ、ベースラインの亜鉛欠乏は味覚障害発症の有意な予測因子とは言えなかったものの、亜鉛補充療法は治療対象例の約半数で有効だったことを提示。

約半数で有効でなかった点については、「化学療法に起因する味覚障害の原因が多様で、亜鉛状態のみに依存するものではないことを示唆しています」と説明した。また、大腸がん患者さんで高い発症頻度だったことを明かし、薬剤側・患者さん側の因子に関するさらなる検討の必要性も指摘した。

今後の研究については、「支持療法の最適化に向けて、亜鉛療法の明確な適応の確立と亜鉛以外の原因の同定に焦点を当てるべきです」と締めくくった。発表を終えた秦副部長は「海外の薬剤師に自分たちの取り組みを紹介できたことは、とても貴重な経験になりました。さまざまな国の発表に触れ、新たな気付きも得ることができました」と振り返り、「この経験を今後の臨床や研究活動にも生かしていきたいです」と声を弾ませた。

専門性を高めていく風土醸成

同院薬剤部は近年、こうした学術活動を活発化。日々の業務で感じた疑問や気付きを研究につなげ、学会発表や論文として積極的に発信している。具体的には、学会発表は20年度5件だったが、25年度は18件に増加。論文は2報から6報となり、著書・総説などを含めると、さらに多くを手がけている。

日々の業務で感じた疑問や気付きを研究や業務改善につなげる活動は、各薬剤師の成長意欲も向上。認定・専門・指導薬剤師など資格取得者は延べ41人（20年）から110人（26年）に増加し、薬学博士の学位取得者も2人から5人となった。渡邊部長は「学術活動や資格取得を通じて、専門性を高めていく風土が少しずつ部内に根付いています」と笑顔。「学術活動を身近なものとして取り組み、一人ひとりが成長し、その成果を国内外に発信できる薬剤部にしていきたいです」と意気軒高だ。

徳洲会介護部会

九州・離島ブロックで初！介護主任・副主任研修開く



講義だけでなく他施設との交流も刺激に

徳洲会介護部会の九州・離島ブロックは特別養護老人ホーム薔薇の樹苑（福岡県）で、介護主任研修と副主任研修をそれぞれ開いた。いずれも集合参加とWEB参加のハイブリッド形式で、同ブロックでは初めて。

主任研修には10人が参加し、SWOT（強み、弱み、機会、脅威）分析からBSC（多面的に経営戦略を評価・分析する手法）の作成、労務管理、コーチング、法令順守、介護の質評価・改善、他部門との連携などをテーマとした講義を受け、最後に「介護主任として取り組む現場の課題」をテーマとしたグループワークを行い、管理者としての実践力を培った。

一方、副主任研修には18人が参加。徳洲会グループに対する理解や目標管理、介護倫理・職業倫理、ハラスメントなどをテーマとした講義を受講。最後に「研修の学びと介護副主任の役割の変化について」をテーマとしたグループワークを行い、利用者中心のケアを実践しながらも、現場のマネジメントも遂行するための知識・技術を磨いた。

終了後、参加者からは「役割を理解できた」、「より専門的な知識を学べて良かった」、「座学だけでなく、グループワークでの意見交換もあり、より良い学びができた」といった声が寄せられるなど、いずれも好評。研修の実施をサポートした福岡徳洲会病院の山下順子・在宅介護支援センター副センター長は「他の施設スタッフとの交流が刺激になった様子がうかがえ、開催して良かったです」と振り返り、来年度以降の継続を望んだ。

一般社団法人徳洲会の重田盟子・看護・介護部長補佐（介護事業部九州・離島ブロック長）も「次年度からはブラッシュアップした教育ガイドラインに沿って、多職種が参加できる研修を企画していきたい」と、続けていく意欲を見せた。

厚木市制70周年記念映画 湘南厚木病院がロケに協力

湘南厚木病院（神奈川県）は厚木市制70周年を記念しオール厚木ロケで制作された映画『キリコのタクト～YELL～』に、ロケ地として撮影場所を提供、同院スタッフがエキストラ出演するなど撮影協力した。

同映画は厚木市出身の音楽グループ「いきものがかり」のヒット曲である『YELL』がモチーフ。音楽教師と教え子たちとの絆や成長の物語を描いた作品だ。監督は雑賀俊朗さん、主演は鈴木京香さん。10月2日から新宿ピカデリーほか全国の映画館で上映。





病院屋上での撮影の様子（上）と、映画『キリコのタクト～YELL～』のポスター

同院での撮影は昨年8月。診療などに支障が出ないよう時間帯を調整し2日がかりで病棟や屋上でのシーンを撮影した。守矢英和院長は「雑賀監督から『イメージしていた以上の絵を撮れました』と言っていただきました。当院は『地域に根差した病院づくり』を掲げています。今後も地域医療に貢献し、地域のイベントなどにも積極的に協力していきたい」と意欲的だ。

羽生病院が「1日看護職・医療職体験」

県内外から高校生100人参加

羽生総合病院（埼玉県）は、高校生を対象としたイベント「1日看護職体験・医療職体験」を4回に分けて実施した。看護師、介護福祉士、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、臨床工学技士、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士を対象に、医療専門職を目指している生徒や、医療従事者に関心をもつ生徒が合計100人参加した。埼玉県だけでなく、栃木県など15校から応募が寄せられた。



スタッフのアドバイスを受けながらAED（自動体外式除細動器）を体験

参加者は髙橋暁行院長、佐藤あけみ看護部長による挨拶、病院紹介の後、各職種の仕事を見学・体験。スタッフの説明を受けながら、医療器具を操作したりした。その後、院内見学、BLS（一次救命処置）講習も行った。最初は緊張した様子がうかがえたが、次第にスタッフとの会話も弾み、質問も相次いだ。

参加者からは「夢が具体的に描けるようになりました」、「人の命を助けるという素晴らしい仕事であると、あらためて感じました」など、一様に満足する声が寄せられた。企画に携わった金子優子・副看護部長と田中千草・副看護部長は「看護職体験は20年以上前から、医療職体験は3年前から行っています。当院を初めて知る方も多く、医療の仕事はもちろん、当院を知っていただく機会にもなれば」と声をそろえる。

“未来の医療職体験フェア”開催

さいたま記念病院が高校生を対象に

さいたま記念病院は地域の高校生を対象に、「未来の医療職体験フェア2026」を開催した。将来、医療の世界を目指す高校生の進路選択を支援するのが目的。多職種の業務内容を説明したり、実際の医療現場・医療機器を体感する機会を設けたりと、進路選びに役立つプログラムを企画した。7校から1～3年生の計35人が参加し大盛況だった。



血管造影装置について臨床工学技士の説明を真剣に聞く生徒たち

当日は石川進院長の挨拶に続き、看護師、薬剤師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床工学技士、管理栄養士の計9つの医療職に関して、仕事の内容や1日の勤務の流れなどを各部門の担当者が説明。徳洲会独自の奨学金制度も紹介した。

この後、複数のグループに分かれて、各職種のもち場を訪れ、実際の医療機器や道具を間近に、説明を受けたり触れたりと体感。手術室ではガウンなどを着用し、腹腔鏡（ふくくうきょう）手術の練習キットで手術体験を行った。

終了後のアンケートに対して、多くの生徒が「とても満足」、「希望した職種に対して、ますます興味が湧いた」と回答。また「他の職種を知ったうえで将来の職業を選ぶ良い機会になりました」、「実際に病院の現場に入ることができ、インターネットで調べるのとは大きく違いました」など感想が聞かれ、好評だった。

WEB医療講演スケジュール

Facebookで公開中！

徳洲会グループ病院では、さまざまなテーマで医療講演を開催している。オンラインで受講可能な講演を徳洲会グループのFacebookで公開中。当該病院のホームページで参加方法などを要チェック！